

しょううつしあさがおぼなし 生写朝顔話

〔解 説〕 天保三年（一八三二）大坂竹本々太夫座初演。全五段、時代物。文政年間、山田案山子（近松徳叟）が儒学者熊沢蕃山の作と伝えられる『露の干ぬ間』という小唄をもとに想を構え、「生

写朝顔日記」と題した浄瑠璃を竹本重太夫の為に創作しましたが上演に至らず、それを翌年、近松柳が「徳叟遺稿朝顔日記」という読本にして人気を呼び、耶麻田加々子が添削して浄瑠璃に仕立てました。その後、嘉永三年（一八五〇）萃松園が添補潤色したものが、現在の作品の基礎となりました。この浄瑠璃は、道中の名所が次々と出て来て変化に富み、すれ道いや錯誤・道化・慟哭等様々なドラマの要素が含まれることから、よく上演される人気作となっています。また、『露の干ぬ間』に琴唄を取り入れて、音楽的にも特徴のある作品になっています。

〔あらすじ〕宮城阿曾次郎と芸州岸戸の家老秋月弓之助の娘深雪は、京の宇治で出会い恋に落ちます。折しも阿曾次郎は鎌倉出張の命を受け、別れ際、朝顔の歌を扇に書いて深雪に与えました。

〔船別れの段〕急遽本国へと引上げる事になった秋月家の一行が明石で風待ちをしている時、深雪は偶然阿曾次郎と再会しますが、それも束の間、二人は再び別れ別れとなります。

国へ帰った深雪は、父から駒沢次郎左衛門に嫁ぐ様言い渡されま

す。駒沢次郎左衛門とは、伯父の養子となり名を改めた宮城阿曾次郎だったので、それを知らぬ深雪は、思い余って家を出、阿曾次郎を探す旅に出ます。

〔浜松小屋の段〕放浪の末、辛苦から盲目となった深雪は、三味線片手に唄を歌って日々をしのいでいました。やがて深雪を探す乳母浅香と浜松で出会いますが、浅香は深雪を捕まえようとやってきた輪抜吉兵衛と争って深手を負い、島田宿の父を尋ねるようになり、言い残して息絶えます。

〔宿屋の段〕駒沢次郎左衛門は岩代多喜太と共に島田の宿の戒屋に泊まります。岩代は同じ藩士であるものの悪人の一味で、しびれ薬で次郎左衛門を亡き者にしようと企てますが、宿屋の主人徳右衛門の機転により失敗します。はからずもこの宿で盲目姿の深雪と再会した次郎左衛門でしたが、任務の途中とあって、それと明かすこともできず、万感の思いで深雪の演奏する朝顔の唄を聞き、徳右衛門に目の秘薬を言付けて出立するのです。次郎左衛門が残した扇から、実は阿曾次郎であった事を知った深雪は慌てて後を追います。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

船別れの段

わだづみの浪の面照る月影も、明石の浦の泊り船。風待つ種のつれづれを慰めかねて阿曾次郎、舳先に立ち出で月かげに、四方を見はらす気晴しの、煙草の煙り吹き靡く船路の旅ぞ物淋し。そばにかゝりし大船は、秋月弓之助が帰国の乗船、乗り手も水夫も船草臥かこ前後も知らぬ高駈。娘深雪はたゞ一人、目さへも合はぬ恋人を、思ひ焦れてうつ／＼と、恋に心をつくし琴、せめて慰むよすがもと、掻き鳴らしたる糸調べ。

ゝ露のひぬ間の朝顔に、照らす日かげのつれなきに

「テ合点の行かぬ。あの歌は過ぎつる宇治の虫狩りに、秋月の娘深雪が扇そがしに某が、書いて与へし朝顔の唱歌。声さへ深雪に生写し。

ハテいぶかしさよ」

と見上ぐれば、あなたも見下す月影に、顔はまさしく、

「深雪殿ではないか」

「ヤア阿曾次郎様。逢ひたかつた」

とばかりにてわれを忘れて乗移るを、抱き取りて口に手を当て、

「ハテ声が高い深雪殿。思ひもよらぬ今の対面、なにゆゑにこの所

に」

「さればいな。宇治でお別れ申してより、片時忘れず泣き暮らすうち、国元に騒動起り、父母ともにはかの旅立ち。所詮逢ふこと叶はぬかと、なんぼう悲しう思うたに、こゝで逢うたは尽きせぬ縁。どうぞこの身をいづくへも、連れて退いて給はれ」

と、思ひ詰めたる娘氣の真実見えて可愛らし。阿曾次郎も心を察し「オ、嬉しいそなたの志、忘れは置かぬ、さりながら、そなたを今連れ退（の）いては、某が武士道立たず。殊にこの度伯父の頼みにて、遁（のが）れぬ主用。なほもつて女を同道しがたき入訳。ある縁ならば添ふ時節もあらう。ガかうしてゐては人の咎め。サアちやつと元の船へ乗つてたも」

「エ、そりや聞えませぬ阿曾次郎様。添はれる時節もあらうとは、当座遁れの捨て詞。お氣に入らずば打明けて、包まずそれというてたべ。添はれぬ時には涸川へ、たとへ身を投げ死するとも、ふたゝびほかの夫迎へ、せぬを誓ひし身の潔白。さらば」

とばかり水底へ、既に飛ばんと立ち上がるを、あわて驚き抱き止め

「コレ待った。はやまるまい」

「イエ／＼放して殺して下さんせ」

「ア、是非もなし。それ程まで思ひ詰めた娘心、見殺しにどうせられう。不義いたずらと世の人口、謗そしらば謗れ連れて退く。これじん尽未来みらいまで女房ぞや」

「エ、嬉しうござんす忝かたじけなくい」

とひつたり抱きつきの夜の、影も隔てぬ比翼鳥、離れがたなき風情なり。阿曾次郎ふつと心つき、

「このまゝに連れて退かば親達の、もしや淵川へも身を投げたかとお歎なげきあらんは定くわのもの。委くわしい様子をつい一筆」

「オ、よういいうて下さんした。私もさう思おもうてゐます。ガどうぞ料紙を貸して下さんせ」

「ヲ、心得し」

と懐紙、腰をさぐつて

「南無三宝。そなたを今抱き止むる拍子、海へなにやら落とせし水音。旅矢立をはめてのけた。ア、どうしたらよからうぞ」

「ヲ、それなら待つて下さんせ。二親はじめつきづきまで、旅草臥の寝入りばな。この間にそつと元船へいんで、一筆書置してきませう」

「ヲ、それよからう。ガコレ必ず物音させて、親達の目が醒めぬや

う」

「心得ました」

と立ち上がれば、阿曾次郎は肩車、あなたの船へ乗り移らす。音に目覚ます船頭ども。

「ヲ、地嵐が吹出したぞ。碇いかりを上げよ、帆を巻け」

と騒ぎ出せば、『なう悲しや』とあせるうち、船は次第に遠ざかる。

『コハなんとせん、かとせん』とあせるはずみに阿曾次郎が、船へ投げ込む扇の別れ、後しら浪を隔ての船、つながぬ縁ぞ

浜松小屋の段

げにや思ふこと、まゝならぬこそ浮世とは、誰がいにしへのかこち言。今はわが身の上に降る、涙の雨の晴れ間なく、哀れや深雪は数々の、憂き重りて目かいさへ、泣きつぶしたる盲目の、力と頼むものとは、わづかに細き竹の杖、あるにかひなき玉の緒の、切れも果てざる三味の糸、露命をつなぐよすがにと、背に結びがけしほくくと、心の闇路たどりくる。あとに大勢里童オホセのりどうてん手に竹きれ振り廻し、

「アレく朝顔の乞食目くら、たゞけく」

「打てよく」

と取廻す。

「ア、コレく目の見えぬ者をそのやうにはせぬものぢやわいな。どれもくよいお子様や。今度よいものがあつたら上げうぞえ」

「エ、いやじゃわい。乞食に誰が物貰ふもんで、ナア、次郎坊」

「ヲ、さうぢやく。あたぎたない乞食の物貰ふもんかい。そんなことぬかしたら、コリヤかうぢやく」

と惣々が、竹で打つやら石打つやら、育ちも下司の腕白ども、寄つ

てかゝつてさいなまれ、

「ア、コレく、もう再び言やしませぬ。こらへて下され謝つた」
と、土にひれ伏し詫げければ、

「ヲ、泣いて謝るなら堪忍してやる。サア皆来い。いつもの土手で芝居ごと、五郎よ、次郎よ」

と呼連れて、道草しながら走り行く。後に深雪は『わつ』と泣き、

「エ、浅ましや情なや、誰あらう岸戸の家老秋月弓之助が娘ともいはれし身が、いかに落ちぶれたればとて、筋目もない里の子に、『乞食よ非人』と打叩かれ、謝りましたはなにごと」

と、身を抱きしめてどうと伏し、かこち涙ぞいぢらしき。

へあら尊と導きたまへ観音寺

遠き国よりはるばると、乳人浅香は浅からぬ、歎きも身にぞ笈摺おいずるの、

深雪の行方尋ねんと、思ひ立つたる巡礼も、辛苦に憂き身やつれ笠露のやどりも取りかねて、杖を力に歩みより、

「コレく女中、卒爾そつじながらチト物をお尋ね申したい」

とおとなふ声に泣き顔隠し

「コレハマアどなた様かは存じませぬが、私は目界めかいの見えぬ者、ガマアなにごとのお尋ねぞ」

と、いふ物ごしからつまはづれ、『どうやら尋ぬるその人に似た』
と思へど形かたち、『これは非人ことに盲目、心の迷ひ』と思ひ返
し、

「ホ、ホ、ホ、わしとしたことが鹿相な。目界の見えぬお人に問
ふことは異なるものなれど、もしこの街道を年の頃は十六七、媚かた
ち人にすぐれ屋敷育ちの大振袖。供をも連れずたゞ一人、通られし
様子をば、もし聞きはなされぬか」

といふは、『正しくわが身の上』と、胸騒ぎしが『待てしばし、世
の中に、似た声の人似たことの、なきにあらざ』と氣を取り直し、
「ヲ、それはマア笑止なことや。往來もしげきこの街道、女中の
一人旅は毛幾人といふ限りなし。さやうにお尋ねなされては、なか
く知れうやうもない。ガマア国はいづく、名はなんと申しますえ」

「サレバイノ、国は芸州福岡、名は深雪様」

といふは『いよ／＼乳母浅香、ヤレ、なつかしや』といひたさも『落
ちぶれ果てし今の身を、われと名乗るも面伏せ、殊にそれぞといふ
ならば、連れていなくて父母に、どの顔下げてまみゆべき。罪深き
ことながら、偽りすかして帰さん』と、なほしも声をくもらせて、
「ヲ、なる程、たしかそんな噂も聞いたれど、その女中は国を出て

よりさまさまの憂き目に逢ひ、やうやう遁れこの辺までは来られ
しが、どうしたことか四五日前に、湊川へ身を投げて、死なしやん
したとやら」

「ヤア、ヤア／＼なに、その女中は身を投げてお果てなされしとや、
アノ身をハア」

『はっ』とばかりに身を打伏し、前後正体泣きもたる。深雪もとも
に悲しさの、涙かくして傍に寄り、

「コレ申し女中様。悲しいはお道理ながら、老少不定の世の習ひ、
定りごととあきらめて、はやう国へお帰りなされ。後弔うてお上げ
なさるが仏のため。海山かけし長の旅、随分怪我のないやうに」
と、いひつゝ立つてかけ小屋へ、探り／＼て入相の、鐘に哀れを添
えにける。

後に浅香はうつとりと、涙ながらの独り言、

「エ、コレ申し、聞えませぬぞえ深雪様。家出なされしその時も、
一言あかして下さったら、仕様模様もあらうもの。おいとしや奥様
は、お前のことを苦に病んで、あけても暮れても泣いてばかり。
果ては重き病の床、死ぬるいまはの際までも、『どうぞ尋ねて連帰

り、せめて位牌に無事な顔を、逢はしてくれ』との遺言。それゆゑ多忌みの明くを待たず国々廻る巡礼も、お前に逢はうばかりじゃに、なぜ死んで下さんした。わしゃお位牌へ言訳を、なんとせうぞ」と身をもだへ、恨みる人は目の前に、ありとも知らぬくどき泣き。聞くに深雪は身も世もあられず、小屋のうちにて齒をかみしめ泣き声せじと喰ひしぱり、こらへこらへし苦しきは、骨も砕くるばかりにて、泣くよりもなほつらかりし。乱るゝ心をおししづめ、浅香は涙の顔をあげ

「ア、我ながら愚痴のいたり、いつまでいふても返らぬこと。この上は菩提のため、打ち残りの札所を廻り、早ふ国へ帰りませふ。さうぢや〜」

と立上り、小屋の戸口へさし寄つて、

「イヤ申し女中様。いかいお世話でござりました。モウおさらば」とゆう月に、別れを告げて行過ぎしが、何か心にうなづきて、木蔭に忍び窺ふとも、知らぬめし盲ひの悲しさに、思はず小屋を転び出で、見へぬながらにのび上がり

「コレイノコレ浅香。今いふたは皆偽り。尋ぬる深雪は〜、わしぢやわいの。声を聞いたその時は、飛び立つ様にあつたれどもな、浅

ましい〜この形で、ドウマア顔が逢はされふ。とはいひながらわしが身を、よく〜大事と思へばこそ、海山越えて憂き苦勞、廻り逢ひは逢ひながら、どうよく胴慾にもよそ〜しう、いふていなした心のうち、どのやうにあらふぞいの。只何事もこれまでの、約束事と諦めて、コレ堪忍したも〜や。取りわけて悲しいは、これ程不孝なこのわしを、やつぱり子ぢやと思召し、おぼしめ身のいたづらを苦しんで、お果てなされた母様の、死目に逢はぬのみならず、御命日さへ露知らず、はかないことが、エ、マあるかいのふ。思へば〜浅ましや。親々の罰ばかりでもこのやうに目がつぶれいでなんとせふ。赦してたべ〜」

手を合わせ、こらへ〜し溜め涙『わっ』と叫びて身を投伏し、前後正体泣沈む。立聞く浅香も忍びかね『わっ』と一声泣出せば、『さてはそこに』と深雪が驚き、こけつ転びつ逃げ行くを、すがりどめて

「マア〜待つて下さんせマア〜待つて下さんせいな。姿形は変はつても、一目にも見違へねども、名乗りかけてもなか〜に、明かさぬ氣質と知つたゆゑ、よそごと余所事にいひなして、木蔭に隠れて始終の様子、立聞きしたも尽させぬ縁。さりながらこの年月骨身を砕き、

やう／＼尋ね逢うたもの。心強う去なそふとは、そりや胴慾ぢや／＼。エ、聞えませぬわいな」

「ヲ、その恨みは理りながら、今も今とていふ通り、身の徒らでこのやうに、落ちぶれ果てし形かたち。どうマアそれと名乗られふ。わしが心の悲しさを、思ひやうて必ず叱つてたもるな謝つた」

と、すがり歎けば

「ヲ、なんのマア叱りませふ／＼ぞいな。たとへどの様にお成りなされても、廻り逢うたがわしや嬉しい。とはいふもの、これはまた、あんまりな落ちぶれやう。日頃の辛苦が思ひやられて、わしや／＼この胸が裂けるやうにござります／＼わいなふ。シタガコレ、お氣遣ひなされますな。かう廻り逢うからは阿曾次郎様のありかを尋ね、きつとお逢はせ申しませうふ。ガなにをいうてもこゝは街道、宿あるかたへ急がん」

と泣入る深雪をいたはりて、立ちあがる折こそあれ、夜道ほか／＼
輪拔吉兵衛『よいことがな』と蚤取眼、二人がそぶり『物ぐさし』
と、傍へ立寄り提灯の、火かげに深雪が顔打眺め

「ヨウ、わりやいつぞや摩耶の婆に、百両で値を極めた娘。いつの間にかぐれに成りおったぞい。しかし医者にかけたら治らぬ

こともあるまい。何分元手いらすの勝負物。ドレ拾うてやろ」と手を取るを、浅香は引退け気色をかへ

「ヤア女と思ひ、慮外しやると赦しはせじ」

と杖押つ取り、仕込みし刀抜きかくる、その手を押へて

「ム、ハ、ハ、ハ、ハ、こりややい。輪拔の吉兵衛というてな、日本国を股にかける人買商売。鯉かきひねくり廻りしても、びくともする男ぢやないわい。ぼろその下つた乱れせうより売られて絹のべゞ着い」

と嘲ける詞聞きかねて

「ヤア推参なかどはかし、見事売るなら売って見や」

と、抜きはなして切り結ぶ。深雪はあせれど盲目の、なんと詮方並木原、二人は打合ふ月明り、こゝをせんとぞいどみ合ふ。いかがはしけん輪拔が石につまづき真つ逆様。まろぶを得たりと起しも立てず、肩背も分かぬめつた斬り。さしもの悪者七転八倒、のた打ち回つて死したるは、心地よくこそ、見えにけり。浅香はしつかとどめの刀

「サア／＼嬉しや深雪様。悪者はしとめました」

と、いふうちよりも心のたるみ、そのままそこに倒れ伏す。深雪は

恐々探り寄り、

「ヤア〜〜そなたも手疵負てきずやつたか、コレ浅香〜いのふ〜」

と、声を限りに呼び生ければ、息吹きかへし目を開き、

「ヲ、深雪様。お身に怪我はなかりしか」

「イヤ〜わしは何ともせぬが、そなたの手疵が氣遣ひな。コレ氣をたしかに持つてたも」

と取りつき歎けば

「ア、コレ声が高ぶござります。わたしはほんのかすり疵、氣遣ふことはござりませぬ。さりながら、もしものことがあつた時は、私

が産みの親、古部三郎兵衛ふるべさぶろべといふ者、この島田の宿に居やしやんす

とのこと。肌身離さぬ守り刀、これを証拠に秋月弓之助が娘と名乗り、何かのことをお頼みあれ。たとへ私が居ぬとても一度は母様の

お位牌へお詫事をあそばせや。誰も見ぬうちサアお出で」

と、刀を納め深雪が背に、負はすも涙ふる三味の、いつか昔にかへらう尾び、いと〜縛もつるゝ心をば、てんじかへても手疵の痛み、盲目ならぬ我身さへ、杖を力に立上り、女心のはりつめし、弓張月の夜半の鐘、尽す忠義の一筋道、伴ひてこそ

宿屋の段

呼び立つる

むざんなるかな秋月の娘深雪は身に積もる、嘆きの数の重なりて埒失ふ目なし鳥。杖柱とも頼みてし浅香はもろく朝露と消え残りたる身一つを。さすがに捨てても縁先の、飛び石探る足元も、危ふき木曾の丸木橋渡り苦しき風情にて、やうやう座して手をつかへ

「召しましたはこのお座敷でござりますか。拙い調べもお笑ひ草。おはもじ様や」

と会釈する顔も深雪がなれの果て

『不便の者や』とせぐり来る、涙飲み込み控へゐる。岩代はそれとも知らず

「ヤア見苦しいそのぎまで我々が目通りへ失せたは、ア、聞き及んだ朝顔めな。エ、きりきり立つて失せをらう」

「アイヤ〜岩代殿、さう没義道に仰せられな。この方に呼び寄せたればこそ、思ひがけなう、思ひがけなう来た者を叱るは武士の情にあらず。コリヤ女、大儀ながらその朝顔とやらの歌、サ、早く唄うて聞かせい」

と望む心は千万無量、知らぬ岩代面ふくらし

「テサテ駒沢氏にはイヤモきついご執心。コリヤコリヤ盲。何なりとも唄へ唄へ」

「サ、早く早く」

「ハイハイハイ唄ひまするでござります」

と焦がるゝ夫のあるぞとも、知らぬ盲の探り手に、恋ゆる心つくし琴、誰かは憂きを斗為吟の、糸より細き指先に、さす爪さへも八ッ橋のやつれ果てたる身を託ち、涙に曇る爪調べ

ゝ露の干ぬ間の朝顔を、照らすひかげのつれなきに、哀れ一村雨のはらはらと降れかし

「ム、夫を慕ふ音律の我々が身にも思ひやられて、思はずも感涙致した。ナウ岩代殿」

「いかさま琴と言ひ器量と言ひ、イヤモなかなか感心仕る。イヤナ二朝顔とやら、そこは定めて冷えるであらう。身共が側で今一曲。

サア所望だ所望だ」

「ア、イヤ岩代殿、もう赦しておやりなされい」

「さりとては駒沢氏、身共が望むを止めさつしやるは、そりや意地の悪いと申すもの」

「イヤさうではござらねども、彼も定めて疲れませうと存じて」

「ハハアしからば曲は止めにしてコリヤコリヤ女。そちも腹からの非人でもあるまい。身の上話もまた一興。話して聞かせ、サどうだどうだ」

「ハイハイよう問ふて下さります。お詞に甘えお話し申すも恥づかしながら、もと私は中国生まれ、様子あつて都の住居。一年宇治の蛸狩りに焦がれ初めたる恋人と、語らふ間さへ夏の夜の短い契りの本意ない別れ、所尋ぬる便りさへ、思ふに任せぬ国の迎ひ。親々に誘はれ難波の浦を船出して、身を尽くしたる憂き思ひ、泣いて明石の風待ちに、たまたま逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹き分けられ、国へ帰れば父母の思ひも寄らぬ夫定め。立つる操を破らじと、屋敷を抜けて数々の憂き目をしのぎ都路へ、上つて聞けばその人は、東の旅と聞く悲しさ。また都を迷ひ出で、いつかは巡り逢坂の関路を後に近江路や、身の終はりさへ定めなく、恋し恋しに目を泣き潰し、ものものあいろも水鳥の陸に彷徨ふ悲しさは、いつの世いかなる報ひにて、重ね重ねの嘆きの数、憐れみ給へ」

とばかりにて、声を忍びて嘆きける

「テサテ哀れな話。しかし男日照りもない世界に、エ、気のせまい

女だな。イヤモしゆんだ話で気が滅入つた。寝酒でもたべ気を晴らさう。イヤナニ女、暇をくれる立ち帰れ」

「ハイハイ有難うござります。左様なればお客様。もうお暇申します」

「ヲ、朝顔とやら大儀であつた。初めて聞いた身の上話。もしその夫が聞くならば、さぞ満足に思ふであらう。ノウ岩代殿」

「左様左様」

「ハ、アこれはまあ御親切なお詞。有難う存じます」

と杖探り取り立ちながら、虫が知らずか何とやら、耳に残りし情けの詞、名残惜しさに泣く泣くも、心は後に探り行く。

行く間遅しと駒沢は、手を鳴らして女を呼び

「コリヤコリヤ徳右衛門に急々対面したし。呼んでくりやれ」

と言ひ付けやり、旅硯の墨すり流し、以前の扇押し開いて、何か書き付け用意の金子、菓の包み取り認めるその所へ、廊下伝いに来かゝる亭主、それと見るより手をつかへ

「只今召しましたは何の御用でござります」

「ヲ、徳右衛門、折入つて頼みたきは先刻の朝顔といふ女、今一応呼び寄せてたもるまいか」

「ハイ畏まりましたはござりますが、彼はすぐに清水と申す方へ参りました。ご用事ならば呼びには遣はしませうが、ア、どうで今夜のお間には」

「ム、残念至極。身は正七ツの出立、マよくよく縁の」

「エ、何と御意なされます」

「アイヤナニ徳右衛門。今の女に謝礼のため、この三品をその方にしつかりと預け置く間、朝顔が参らば渡してくりやれ」

「ハイハイ。ヲ、コリヤマア夥しいお金。その上結構な女子扇、お薬までも」

「ヲ、サその薬は大明国秘法の目薬。甲子の年に出生せし、男子の生血を取つて服すれば、いかなる眼病も即座に平癒。朝顔に渡してくりやれ」

「これはこれは何から何まで、お心を籠められた下されもの。参り次第相渡し悦ばしませう」

と受け取る折しも時計の七ツ。

「ム、アリアヤもう七ツの刻限」

と数ふるうちに岩代多喜太、装束改め旅出立、同勢引き連れ立ち出でて

「イザ駒沢氏、出立仕らうか」

と勸むる詞に次郎左衛門、衣服繕ひ立ち出づれば、見送る亭主が暇乞ひ心そぐはぬ駒沢、岩代、打ち連れてこそ出でて行く。

深雪は何か気にかゝり、座敷しまうてうとうとと、又立ち帰る切戸の内、徳右衛門目早に見て

「ヲ、朝顔か遅かつた。宵のお客様がもう一度呼びにやつてくれいと仰つたれど、清水へ去たと聞いたゆゑ、お断り申したれば、今のお立ちなされた。しかしまあ悦びや。大枚のお金と扇、また結構な目薬、わが身にやつてくれいとお預けなされたわいの」

「これは冥加に余る事。お礼申さいで残り多い。ガ申し旦那様。この扇に何ぞ書いてはござりませぬか。ちよつと見てくださりませ」
「ヲ、ドレドレ。エ、金地に一輪朝顔。露の干ぬ間が書いてある。裏に、宮城阿曾次郎こと駒沢次郎左衛門、と書いてあるぞや」

「エ、アノ宮城阿曾次郎こと駒沢次郎左衛門とその扇に」

「ヲイノ」

「ハア、」

『ハツ』とばかりに俄の仰天

「エ、知らなんだ知らなんだ知らなんだわいなあ。道理でよう似た

声と思うたが、そんならやつぱり阿曾次郎様であつたか。申し申し旦那様、そのお客様はいつお立ちなされたえ」

「ヲ、今の先の事ぢやが、わが身はまたお馴染みか」

「エ、馴染みどころか、年月尋ぬる夫でござんすわいな。かう言ふ内も心が急ぐ。追つ付いてたつた一言」

と行かんとするを引き留め

「ア、コレマア待ちや待ちや。折悪う雨も降り出し、この暗い一人は危ない危ない」

「イエイエたとへ死んでも厭ひはせぬ」

「サ、それはさうでも盲の身で、危ない危ない」

「イエイエ放して下さい」

「これはしたり危ないと言ふに」

「イヤイヤ放して放して」

と突き退けはね退け、杖を力に降る雨の、いつかな厭はぬ女の念力、後を慕うて追ふて行く。

名に高き街道一の大井川、篠を乱して降る雨に、打ち交じりなるはたたがみ、漲り落つる水音は物凄くもまた凄まじき。夫を慕ふ念力に道の難所も見へぬ目も、厭はぬ深雪がこけつ転びつ、やうやう

こゝに川の側

「ナウ川越たち、駒沢次郎左衛門様といふお侍。もう川をお越しなされたか。まだか聞かして聞かして」

と云ふ声さへも息切れの声に川越、口々に

「ヲ、その侍は今の先渡つた、ガ俄の大水で川が止まった。川止め川止め」

「ヤア何、川が止まつた。ハ、ア悲しや」

と、張り詰めし力も落ちて伏し転び、前後不覚に泣きけるが、また起き上がつて見えぬ目に、空を睨んで

「天道様、エ、聞こへませぬ聞こえませぬ、聞こへませぬわいな。

この年月の艱難辛苦も、どうぞま一度その人に逢はしてたべと片時も、祈らぬ間とでもないものを、今日に限つてこの大雨。川止めとは川止めとは、エ、何事ぞいの。思へばこの身は先の世で、いかなる事の罪せしぞ。さてもさても味気なや、焦がれ焦がれたその人に逢うても知らぬ盲目の、この目はいかなる悪業ぞや。夫の後を恋ひ慕ひ、石になつたる松浦瀧、ひれふる山の悲しみも、身に比べては数ならず、三千世界を尋ねてもこんな因果がまたと世にあるべきかは」

と口説き立て、拳を握り身を震はし、『ワツ』とばかりに泣く深雪露の干ぬ間の朝顔も、山田の恵みいや増さり、茂れる朝顔物語、未の世までも著し。